

## パウロの「主の晩餐」定型の起源に関する一考察

村 上 久

コリントの教会における主の晩餐時の混乱と弊害は皮肉にも「主の晩餐」の制定語に関する貴重な資料を我々に残してくれる結果となった。この記事（第一コリント 一一・二三―二五）は主の晩餐に関して最初に文字になった最古の文書で、五四年頃に書き下されたものである。そしてパウロはこの主の晩餐伝承を彼以前の教会の伝承として位置づけしているのみならず、「主から受けた」としてその權威と起源が主イエスのことばに遡源されるものとしているのである。この主の晩餐定型がコリントの教会に紹介されたのが五〇年頃となる、とすればパウロがこの定型を受けたのは五〇年以前ということになる。ではパウロはこれをいつ、どこで、どの教会から受けたのであろうか。

この小論においてはパウロの主の晩餐定型の起源を考察する。そしてこの論考のテーゼはこの定型の起源をダマスコの教会にあるとし、イエスの死後間もない三三年頃のものとして結論するに至るのである。方法論的にはまずこの定型が一箇の独立した伝承としての主の晩餐定型であることを確認し、この定型に見られるギリシャ語化の諸現象からその起源を探ることとする。紙数の制約上、特に言語の面からの考察に限定して論考する。さらに、このテーゼ―三三―年ダマスコ教会―を証拠づける資料として、セム語的要素の最も強い最古のテキストと認められているマルコの定型

とパウロの定型とを比較検討し、パウロの回心後の動行と原始キリスト教のパンさきについて調べることをとする。

## 一 独立した伝承としての主の晩餐定型

パウロは実に明確に、主の晩餐定型が彼の創作や直接啓示によるのではなく、彼以前の教会から継承されてコリントの教会へ伝達したものであると語っている。そしてその制定語が主イエスに由来するものであると告げている。

*Ἐγὼ γὰρ κληθήσομαι ἀπὸ τοῦ κυρίου ὁ καὶ παροῦσα ἴδω, ἐκ τῆς παραλήψεως τῆς παραδοῦσας* とは共にラビが伝承継承に使用する専門用語で、*qibbal* と *nasar* に相当する言葉であることが明らかにされている。<sup>②</sup> これは主の晩餐制定の伝承が中断されることなく、そのままイエスのことばに遡源することを意味しているのみならず、もともと一箇の独立した伝承として定型化され、教会で大切に継承されていたことを明らかにするものである。<sup>③</sup>

この事実を確証づけてくれるものは第一コリント一五・三以下に記されている信仰告白(ケリユグマ)定型である。ここでもパウロは *παράληψεν* と *παράδοσας* の専門語を用いている。

これがパウロ以前の伝承で、定型化された信仰告白文(又はその一部)であることに疑いをはさむ余地は全くない。<sup>④</sup> 言語の面からみても非パウロ的用語法が顕著である。<sup>⑤</sup> 顕著なものを取り上げてみると、(一) *κατὰ τὰς ἡμέρας* が二回、三節と四節に出てくる。この用法はパウロの他の箇所では決して見い出せない。パウロの通常の方法は *καθὸς ἡμέρας* である。(二) *τῆ ἡμέρᾳ τῆ τοιῆ* では序数が後置されているが、これはパウロ的でない。(三) 弟子たちを *ἀδελφοὶ* と呼ぶ言い方は非パウロ的で、彼の通常の方法は *οἱ ἀδελφοὶ* である。

エレミアス<sup>⑥</sup>は厳密な意味での確証がないと断りつつも、間接的にこの信仰告白定型がセム語の原テキストの翻訳で

あることを指摘している。それはここに用いられている言語がいずれもセム語的色彩の強いギリシヤ語であることから推してである。<sup>⑦</sup> 彼は九項目にわたるセム語的要素の検討を重ねてのち、これらすべての事柄からケリユグマはパウロによって作られたのではなく、ユダヤ人キリスト者の起源をもつことが確実に結論される。それはたぶん、アラム語で話していた最古の教団に由来する<sup>⑧</sup>と言いつつ切っている。

さて、パウロは使徒的ケリユグマの定型をいつ、どこで受けたのであろうか。可能性はいくつか考えられる。回心後教会の交わりに加えられた時か(ダマスコ)、回心後三年してエルサレムを訪問したあの十五日間の滞在時だったのか(エルサレム)、あるいはアンテオケ教会から宣教師として派遣された時であったのか(アンテオケ)、後述の回心後のパウロの動行からも結論づけられると思うが、アナニヤによって受洗し、ダマスコの教会の交わりに加えられたその時であったことが確実視される。受洗直前にアナニヤから教授されたバプテスマ用の信条であったとも言われているのである。<sup>⑨</sup>

ルカの福音書の序文によればテオピロは教えを (*κατηχηθῆς*) すでに受けていたことが記されている。そしてその受けた教えが (*λογίων*) 確かなものであることを知ってほしいと述べられている。ここで信条的教えとしてのロギアの存在が裏付けられる。原始キリスト教で回心者が受洗後に使徒の教え (*τῆ δόξης τῶν ἀποστόλων*) を受けていたことが証しされている。ペンテコステの日の出来事である。この時期にすでに使徒の教えが信条的に伝承として体系化されていたと断定できるのである。であるとすれば、第一コリント一五・三以下の信仰告白定型がダマスコの教会において用いられていたことがわかる。したがって、パウロは非常に早い時期にダマスコの教会からこの告白定型を受けたと結論することができる。

このことはパウロの主の晩餐定型の起源に関して決定的意義をもつものである。すなわち、信仰告白定型をダマス

コ教会から受けた伝承として認めるとき、主の晩餐定型もそれと同じように、ダマスコの教会に由来するものであると認めることが十分にできるからである。パウロの主の晩餐定型は一箇の独立した伝承としてダマスコの教会から継承されたもので、宣教地の諸教会へ伝え(καταδοσ)られたのである。

## 二 主の晩餐定型のギリシヤ語化現象

主の晩餐定型の構成用語に関して、そこにギリシヤ語化傾向のあることが指摘されている。このことが明らかとされるのは、礼典定型以前の伝承を内容にもつていて、アラム語を話す最古の教会に由来すると言われているマルコの制定語との比較においてである。それはマルコのセム語的制定語がパウロの定型において変形していたり、調整されていたりすることが明らかに認められるからである。これは恐らくそれが用いられる教会がギリシヤ語を使用しているために、彼らを考慮して構成されたためであろう。現実の状況と必要に則して定型化が進められたことを示すものである。

パウロの主の晩餐定型の導入部では *καί* の代わりに *ο κύριος* を主語において格調の高い文にしている。これは *καί* の用法がギリシヤ語ではなめらかでないからであろう。また *ο κύριος* のあとに人称代名詞を置かないでいるが、これはパレスチナ以外の地で形成されたことを物語っている。それは G・ダルマンが指摘しているように、他の言葉をそえないでただ *ο κύριος* と記述することがパレスチナの用法に反するからである。第一コリント一・二四で *εὐχαριστίας* が用いられているが、マルコの記事では *εὐχαρίσας* である。これは明らかに *εὐχαρίσθαι* が *εὐχαριστέω* に置きかえられていることを示す。恐らく *εὐχαρίσθαι* のもつギリシヤ語の意味からその誤解をさけようと

する配慮にもとづく変更であろう。ヘレニズムの世界では *εὐχαρίσθαι* は名詞を伴って「誰かをほめる」とか「誰かをたたえる」の意味をもつていて、祝福の意味はこの言葉に見当らない。

祝福の祈りをあらわす意味での「祝福する」の用法はヘブライ的である。また、この語の絶対的用法はセム語的なのである。このように *εὐχαρίσθαι* を *εὐχαριστέω* に代えてゐることはギリシヤ語化のあらわれであることがわかる。

この「食卓の祈禱をささげる」という意味での *εὐχαριστέω* はヘレニズム的ユダヤ教には見当らないのであるが、新約聖書の中ではその豊富な用例があり、キリスト教の専門用語であると言えよう。

二四節の *το ὄψω βίου* の冠詞を伴う付加語の後置はギリシヤ語ではなめらかで何の抵抗もないが、この表現法をアラム語に逆に翻訳することは不可能であり、ヘブル語でも分詞なしですますことはまずないのだと指摘されている。したがってアラム語の伝承にさかのぼってその起源を求めることは困難である。

これまでの研究をおして解るように、パウロの定型が確かにギリシヤ語化の現象を示しており、セム語的用法を調整し変更を加えていることが判明した。こうした証拠にもとづいて、エレミアス<sup>⑩</sup>はパウロの定型がヘレニズムの領域で形成されたもので、シリアのアンテオケ教会において用いられていた聖餐のことばの定型を記したものであると考えている。すなわち、パウロの定型を四〇年代の前半に位置づけ、その定型の起源をアンテオケ教会に求めるのである。

確かに、パウロの定型がギリシヤ語を話す群を対象としていたことは事実である。また、この定型のギリシヤ語化がエルサレムの原始キリスト教によって行われなかったことも確かなことである。だがこのギリシヤ語化の現象を四〇年代のアンテオケ教会の手になることは断定しがたいのではなからうか。なぜならパウロの定型のギリシヤ語化はパウロ自身によって成されたとしても十分に可能なことだからである。事実、冠詞を伴った付加語の後置

—τὸ *breiō* *dyuōn*—はパウロの文体の特徴である。したがってこれはパウロの言葉と理解して差しつかえなからう。また、強調の効果のために人称代名詞が所属する名詞の前に置かれている。共観福音書では名詞の後に置かれている。すなわちこの用法は他の定型には用いられていないのである。恐らくパウロに由来すると考えられよう。

最後にヘレニスト教会が後になって付加した解釈言辭として主張されている契約に関する言葉を取りあげてみる。後代の創作とする理由として指摘されているのはマルコ一四・二四 *τὸ αἶμα τοῦ σώματος* が言語上逐語的にアラム語やヘブル語にもどして翻訳することが大変困難であることによる。とくに代名詞接尾語を伴う名詞は普通属格をその後にとらないからである。他方パウロの定型はギリシヤ語的になめらかでパウロ的表現で書かれている。しかしこのゆえに契約に関する言辭を後代のヘレニスト教団の付加語の解釈言辭とすることは早計である。R・H・フラー<sup>⑧</sup>は、マルコの表現形式のゆえに最古のアラム語のテキストに含まれていなかったという結論は容易に引き出せないと主張する。彼はダニエル書二・三四の構成からこの表現形式がアラム語で可能であることを示すと共に、ダルマンを引用して彼がマルコのテキストをアラム語にもどして翻訳しなおしている証拠をあげている。

また契約に関する内容面から考察しても、これはイエスの死を解釈する中心的思想である。契約思想は血と最も緊密な関係にあり、<sup>⑨</sup>イエスの使命を構成する重要な要素である。イエスのバプテスマにおける天からの声はイエスの召命の内容を啓示するもので、神の子と受難の僕としての使命を明らかにしている。さらに終末的神の国とも契約思想は結びついていて、イエスの宣教における支配的モチーフである。したがってマルコとパウロの定型が表現形式こそ異なっているが、共通の思想をイエスのことばとして記していることから、両定型の伝承が分枝する以前からイエスの死を契約の成就とする言辭はあったと考えることができる。マルコのぎごちなく感じられるギリシヤ語の表現形式がアラム語のテキストの可能性を否定するというよりも、むしろそのテキストの存在を認めてこそ最もよく説明が

つくだのではないだろうか。百歩譲って *τὸς* *σώματος* を解釈言辭として付加したものととしても、<sup>⑩</sup>原始のアラム語を話す教会の付加としなければならない。<sup>⑪</sup>パウロの定型はマルコの表現形式をさらになめらかなものに代えたもので、パウロ表現の特徴を備えているのである。

以上パウロの定型のギリシヤ語化現象の諸事項を検討してみたが、パウロの定型が三三年から三五年にかけてすでにダマスコの教会で定型化されて、礼典定型として使用されていたものであることを否定する決定的根拠は見い出せないのである。パウロは回心直後に主の晩餐伝承をうけ、パウロの手による調整の可能性を認めつつ、その定型の起源をダマスコの教会にもついていると結論することができる。<sup>⑫</sup>

### 三 最古のテキストとの比較

これまでのパウロ定型の起源に関する認識は次の問題を提起する。制定語伝承の中で最古の原セム語本文に最も近いマルコの記事が根本においてパウロの定型と同じ伝承内容を表わしているものでなければならぬということである。だが両型の間に二つの相違がある。一つは、パンと杯に関する言辭のあとで記念としてのくり返し命令がマルコに欠けていることである。もう一つはマルコ一四・二五の終末的言辭がパウロに欠けていることである。順次とり上げてみる。

パウロはこのくり返し命令が主のことばにその起源を有する伝承の一部として紹介している。もちろん、これはイエスのことばそのもの (*ipsissima verba*) の意味においてではない。ではマルコの伝承に欠如している理由は何であったのか。彼がこの命令に無知であったのか。マルコの伝承系統から脱落してしまっていたのか。それともヘレニス

ト教会の創作であったのか。パウロの創作としたリーツマンは、パウロがイエスの死を強調して単なる会食礼としての主の晩餐を彼の死を記念する聖餐へと変形してしまつたと主張した。そしてその背景をヘレニズムの神秘宗教の死の記念祭に求めたのである。しかし異教の世界にこの思想的背景を求める必要は少しもない。ユダヤの世界に並行的思想は豊かにあるからだ。旧約聖書の中に記念・想起の思想は豊かにもられていた。とりわけ過越祭において記念の思想は中心的な位置を占めている。最後の晩餐が過越の食事であるならば、過越の食事の枠組の中で主の晩餐の制定語が理解されなければならない。また、そうすることによって主の晩餐の記念の意味を最もよく、しかも十分に理解することができるのである。

デービスはリーツマンとは異なる立場から、すなわちパウロが最後の晩餐を過越の食事との関連において捉えることにより付加したものであると論じている。それはパウロが主の晩餐を新しい過越祭として理解したため、デービスの表現を借りれば「伝承のラビ化」の結果とみている。本当にそうなのであろうか。

言語の面からこれを考えてみても、ヒギンズがE・ローマイヤーを引用して指摘しているように、くり返し命令の非パウロ的用語法が認められるのである。 *akutynais* 及び *bakis* の用法がここ以外には見当たらないのである。パウロによって使用されていない用語で、非パウロ的と考えることができる。記念の思想は原始キリスト教が旧約聖書の教えから親しんでいたものであつて、すでにパウロ以前の教会で用いられていた用語であるとすべきである。パウロの受けた伝承の一部を構成していたと考えるべきと思う。

イエスが最後の晩餐において、パウロの定型のとおり一字一句御自分で語られたかどうかを確かめることはできない。だがイエスがこれを記念として行うようにと命令されたとする伝承は、イエスの最後の晩餐におけるイエスの真意と目的とに調和していると断言できるのである。内容上も言語の面からもパウロ以前に形成された伝承に所属していたことが確かめられたと言える。ではなぜマルコに欠如していたのか。確かな証拠も理由も見い出せないもの、くり返し命令が原始キリスト教の確信であることにはかわりない。たとえこのくり返し命令が欠如していても、それだけでマルコの伝承系統の内容を用いていたエルサレム教会が主の晩餐をくり返し行っていたことと考え合わせる<sup>②</sup>と、この命令が極めて当然のこととして確信されていたとの認識にいたるのである。

次に終末的言辭のパウロにおける欠如であるが、これはマルコの伝承に欠けているのは異なり、パウロの定型の起源に関して特に障碍となりえない性質のものである。イエスの終末的言辭に關しその信憑性を疑うことはまず考えられない。この思想は徹底してユダヤ的で、言語的にもセム語的である。ここに用いられている *tos yachyiaros* *tyis diethlou* は過越の儀式的術語であつて、最後の晩餐が過越の食事を表わすのみか、最後の晩餐が文字どおり最後の過越祭になるという、主イエスのみ旨を示している。同時に神の国の究極的実現と完成を待望することばである。パウロの伝承にはマルコの表現は見当たらない。しかし、第一コリント一・二六のことば「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」は、マルコの終末的言辭を保存しているし、それを保存している原始キリスト教の伝承を継承しているものといえよう。言語上の相違はあるが、その内容に關して言えば主イエスに遡源されることがわかる。

このようにパウロの定型とマルコの定型との相違を調べてみると、これらがパウロの定型とその古さに関して何の障碍にもならないばかりか、むしろ積極的に両定型がイエスのことばに遡源される共通の原伝承に由来するものであることが判明したのである。

## 四。パウロの回心後の動行

一般的にはパウロの自伝的素描(ガラテヤ一・一五―一七)における回心後のパウロの動行から、ダマスコの教会にパウロの主の晩餐定型の起源を求める見解と矛盾すると考えられている。だがこの批判は当たらない。ガラテヤ書の記事とルカの記事(使徒九・一〇―二五)と第二コリント二・三二とを総合して考察してみると、回心後の動行をかなり正確に把握できるのである。パウロの自伝的素描によれば、回心後誰とも相談せず直ちにアラビヤへ赴き、再びダマスコに帰る。その後エルサレムに上ったが、回心後三年を経過していたのである。「私はすぐに人には相談せず」とは誰とも会わなかったという意味ではない。「数日間ダマスコの弟子たちと共にいた」(使徒九・一九)のである。ガラテヤ書におけるパウロの主張は、彼の使徒召命と使徒職が彼以前の使徒たちからの権能の賦与によるものではないこと、またそのようなものを求めたのではないということである。彼の使徒職が神からの直接啓示による神の選びによる神の権威に在すると弁明しているのだ。

使徒の働きによれば、パウロは回心後アナニヤによって受洗して教会に加えられ、弟子たちと数日間の交わりをなすが、その後ダマスコの諸会堂でイエスが神の子であり、キリストであることを論証して人々を言い伏せたのである。相当の日数がたってからユダヤ人のパウロ殺害の陰謀が明るみにでる。「ダマスコではアレタ王の代官が、私を捕えようとしてダマスコの町を監視しました。そのとき私は、城壁の窓からかごで降り降ろされ、彼の手をのがれました」(第二コリント一一・三二、三三)。これはパウロ自身の証言である。そしてこのダマスコ脱出は彼の弟子たちが成功させたものであった。ルカはパウロのアラビヤ行きには一言も触れていない。アラビヤ滞在の期間も、ダマス

コ在任の期間も、三年の間の出来事であることは明瞭なのだが、それぞれの期間に関して具体的数値をもって答えることは不可能である。ただし「多くの日数がたつてのち」(九・二三)に殺害計略が立てられていることからして、相当の日数ダマスコに滞在していたと思われる。確かなことは彼が「多くの日数」(九・二三)「諸会堂でイエスが神の子である」(九・二〇)と宣教し「ますます力を増し、イエスがキリストであることを証明し、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた」(九・二二)事実である。さらに注目すべきことは、パウロの脱出の立役者たちが彼の弟子たち(*shishyot avrot*)であったことである。「彼の」弟子たちと呼ばれるほどの弟子たちが起され、彼の宣教の顕著な活動と結実を示すものである。

さらに彼の宣教はダマスコのユダヤ人のみならず、ナベタイ王国の統治者たちをも悩ましたようである。当時のダマスコにはナベタイ人が多数いて、その民団がアレタ王の代官によって治められていた。パウロの計略が地元のユダヤ人当局者とナベタイ人の統治者によって遂行されたことから考えて、町の統治者の手を結ばせて強硬策をとらせるほど、パウロの宣教活動が積極的で、目に見えて顕著であったことを如実に物語っている。またパウロのアラビヤ滞在は単に宗教的退修の目的をもっていただけでなく、アラビヤに住むナベタイ人の中であって宣教に従事していたとも考えられる。R・H・フラシーなどはパウロが回心後ダマスコを宣教基地にしてアラビヤのナベタイ人に伝道していった可能性を認めている。大方の想像以上に、回心後のパウロの宣教活動はいわゆるパウロの伝道旅行(使徒の働き一三章から始まる)に勝るとも劣らない積極的なものであったことを知るのである。

このダマスコの教会でパウロが主の晩餐についてその伝承に触れることなく、したがってアンテオケの教会で初めて主の晩餐定型に出会ったことは、非常に不可解なことだと言わなければならない。彼がダマスコの教会の交わりに加えられ、彼らから、ケリユグマの定型と同じように、主の晩餐伝承及びその由来についてつぶさに聞かされ

ていたと考えるべきではなからうか。聞かされなければ、彼自ら聞き、その教えを受けたはずである。ダマスコの教会から主の晩餐伝承について一言も聞かされず、何一つ教えられなかったと想像することは実に困難なことである。

## 五 原始キリスト教におけるパン裂き

ではパウロの主の晩餐定型の起源に関するこれまでの議論を裏付けてくれるような証拠を、原始キリスト教の史実から得ることが出来るであろうか。つまり、使徒の働きの記事にパウロの回心年(三三年頃)か、それ以前に主の晩餐が守られていたという証拠があるだろうか、ということである。すでに、主の晩餐のくり返し命令がパウロの創作ではなく、イエスの最後の晩餐における教えと最後の晩餐の性格から、イエスのことばに遡源されることを確認してきた。これが真実であれば、原始キリスト教は主の晩餐を守っていたことになる。ならばその証拠が見い出せるはずだと思われる。事実その証拠となる記事がある。「パン裂き」の行為が指摘されている。

このパン裂きの行為が何を意味しているのか、については議論の多いことである。使徒の働き二・四二、四六のパン裂きは主の晩餐を表わしていたのであろうか。それとも礼典としての主の晩餐とは全く関係のない、一般的会食にすぎなかったのであろうか。

使徒の働き二〇・七に「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった」ことが記されている。このパン裂きは明らかに主の晩餐を意味すると言えよう。夜中すぎてからパンを裂き味わった(二〇・一一)ことから、パン裂きが主の晩餐を表わす用語として採用されていたことがわかる。そうならば、使徒の働き二・四二、四六のパン裂きも同様に、主の晩餐であると断定できるであらうか。F・F・ブルース<sup>④</sup>はこのパン裂きが主の晩餐に言及しているこ

とは疑い得ないのではないかと説いている。また二・四六ではパンを裂くことと食事を共にすることが区別されていることから、パン裂きが礼典としての主の晩餐を意味していると解釈できるのである。パンを裂く行為を強調したこの表現はこれが祝いの食事の重要な要素を表わしていることを示唆している。

しかし、これが主の晩餐を指示しているのであれば、イエスの死、杯、又はぶどう酒の言及があつて然るべきであるのに、どこにもそれらが見当らない。これらの欠如はむしろ、パン裂きが食卓の交わりを表わしているからだと言われている。このパン裂きは礼典として主の晩餐が形成される、その一つ前の発展段階を示すものであつて、主の晩餐が聖餐としてエルサレムの教会で守られていなかったことを示唆する証拠資料とされている。したがって使徒の働きのパン裂き行為からは、パウロの定型にみられる主の晩餐がエルサレムの教会で行われていたという確証は導き出せないと考えられている<sup>⑤</sup>。

原始キリスト教のパン裂き行為が主の晩餐を表わしていることの蓋然性は、これまでの議論からも認められるのであるが、確実な証拠と言うには不十分であるとされていた。だが果してそうであらうか。

使徒の働き二・四二でパン裂きとの関係で用いられている動詞から、この節が原始キリスト教の礼拝様式を表わしていることが指摘されている<sup>⑥</sup>。

*ἡσάυ δὲ πρῶτακρῆσθούρες*     *τῆν δὶδάκην τῶν ἀποστόλων*

*καὶ*     *τῆν κοινωσίαν*

*τῆν κλάσιν τοῦ ἀρτου*

*καὶ*     *ταύς πρῶταυχαίς*

ここに用いられている分詞 *πρῶτακρῆσθούρες* の用語法に関して、この語が「規則的に正しくシナゴグに通う」

ことを意味することが明らかにされた。<sup>④</sup>この用語法をこの節に適用すると、「規則的に正しく礼拝行為にたずさわる」という意味をもつことになり、一・一四六の *καθ' ἑλευσενου ποσκαρεσενδρες θηθουαδου εἰ τῷ ἑρῶ* は「日」といふ心をもつて宮で礼拝行為をなしていた」という意味になる。この動詞は一・一四と六・四でも用いられている。二・四二では四つの熟語で礼拝行為が形成されていることになる。使徒の教え、食卓の交わり、パン裂き、そして祈りである。礼拝行為としてのパン裂きは主の晩餐以外の何ものでもない。

パン裂きは本来の用法において食事のことを意味するものではない。これはパンの塊を手で裂く行為、及び食事を開始せしめる儀式を表わすもので、ラビの文献から明らかにされているように、食事の前の食卓の祈禱に関する術語である。<sup>⑤</sup>このようにパン裂きの表現法は食事をあらわす用法として用いられていないのである。したがって、原始キリスト教のパン裂きは単に会食を意味する用語ではなく、主の晩餐の礼典を意味するものと理解しなければならぬ。そして、このパン裂き行為が原始キリスト教の、主の晩餐を表わす専門用語であったと結論をくだすことができる。

ではなぜ主の晩餐がパン裂きと呼ばれるようになったのだろうか。この説明が必要となる。最後の晩餐においてパンが裂かれて、パンに関する言辭が語られた。そして食事がそれに続き、食事のあとで杯に関する言辭が語られている。食事を媒介にしてその前後にパン裂きと杯とが来ている。パウロの定型はこの史実を「食事ののち」という言葉で証している。しかし実際には、食事をはさむ主の晩餐の儀式が非常に早い時期に、食事と礼典としての主の晩餐とに分離し、両方が食卓の交わり（食事）と主の晩餐（パン裂き）として独立して守られるようになったと思われる。使徒の働き二〇・一、一一におけるパン裂きは明らかに食事と分離していることがわかる。夜中すぎてからパンを裂き味わっている。ここではもはや、食事をはさむ儀式としての主の晩餐ではなく、両方がそれぞれ独立していることを示唆している。

コリントの教会の主の晩餐記事も両方の分離が前提とされているようである。教会における会食に際して混乱と弊害が生じて、主の晩餐が正しく守られないでいる様子が描かれている。共同の食事の交わりが聖餐としての主の晩餐に先行して行われているようである。コリントの教会に伝承として伝えたパウロの主の晩餐定型は、食事をはさむ主の晩餐であることを明言しているにもかかわらず、それでいてこれを受けたコリントの教会は食事と聖餐としての主の晩餐とを独立した形で守っていたことがはっきりする。この分離はマルコの定型にも認められる。パンと杯とが無媒介に連続しているのである。使徒の働き二・四二の交わりを食卓の交わりと解釈すると、すでに食卓の交わりと主の晩餐とが独立したものとなっていたことがわかる。したがって、主の晩餐がパン裂きと呼ばれるようになったのは、食事と聖餐としての主の晩餐が互いに分離し、独立した結果生じたものと考えられる。

この他にもパン裂きが主の晩餐を表わす専門用語となった事情を挙げることができる。それは原始キリスト教でパンだけの儀式が行われていたことによる。<sup>⑥</sup>日常ぶどう酒を入手することはむずかしく、したがってぶどう酒を飲むことが普通の事柄でなかったことや、原始キリスト教の信者が非常に貧しかったことなどから、主の晩餐がパンだけのものではあったとも考えられる。事実パウロの定型にはぶどう酒のみ、「飲むたびに」の限定語が付加されている。ルカの長文テキストにも、ぶどう酒にのみくり返し命令が欠けている。「最も早い時期にしばしば行われただけでなく、むしろそれが普通であった」とすれば、パン裂きの用語法にかなうものであろう。しかし、この事情はパン裂きが主の晩餐を表わすようになった決定的・根本的理由とは考えられないのではなからうか。むしろ、食事と主の晩餐との分離により生じたと思われる。



これまでの考察から、コリントの教会へ伝えられたパウロの主の晩餐定型は、パウロが彼以前の教会から伝承として受けたもので、彼の創作ではないことや、この定型が使徒的ケリュグマと同様に非常に古い教会の伝承であることも判明した。

この定型の内容はイエスの *ipsisima-verba* を表わすものではないが、イエスの最後の晩餐におけることばに遡源されることが明らかにされた。そしてこの定型の起源に関しては、パウロの回心直後にダマスコの教会から受けたことも確認できた。この定型はイエスの死後三年から四年を経過して形成された、と結論づけることができる。

注

- ① H・リーツマンは前置詞 *atō* の用法から、人間的権威を引用しているならば *katō* を採用しているはずであり、直接啓示によるとの見解を表明した。だがクンメルがリーツマンのコリント書注解の改訂版で、制定語はイエスに起源するものであると述べて、*katō* より *atō* を用いた理由はその伝承の究極的起源がイエスにあることを強調したためであった、と指摘している。
- ② J・エレミアス『イエスの晩餐のことば』(田辺明子訳、日本基督教団出版局、一九七四年)一五四頁。Strack-Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrash*, iii, 1926, p. 444; W.D. Davis, *Paul and Rabbinic Judaism*, 1962, pp. 248-249. テーブスは 'qibbel がその用法において特定の言葉を直接受け継ぐという意味をも有すると書いている。
- ③ エレミアス『前掲書』一六〇頁
- ④ A.H. Hunter, *Paul and His Predecessors*, 1961, p. 16. この信仰告白定型として、三節後半の *ὁ κύριος* から五節の *ὁδοὶ*

までであることが一般的に認められている。 *katō* の用法(四回)は勿論のこと *ἐπιπέρας* と *ὁδοὶ* などが信仰告白定型に見られる用語であることも指摘されている。

- ⑤ エレミアス『前掲書』一五五頁—一五八頁に詳述されている。
- ⑥ エレミアス『同書』一五六頁
- ⑦ 反論もあるが決定的な理由をもたない。H・コンツェルマンはエレミアスの指摘する言語上の特性は必ずしも原テキストを示唆するものではなく、この告白文が初めからギリシヤ語で書き上げられたものであると主張している。ブセツトに代表される見解もこの告白文がアンテオケ、ダマスコ、タルソの異邦人教会に流布していた福音の概要であって、パレスチナ地方に流布していた信仰告白文とは著しく異なっていたとの議論を展開している。
- ⑧ エレミアス『前掲書』一五八頁
- ⑨ コリント人への手紙第一、一五・一
- ⑩ Hunter, *op. cit.*, p. 16.
- ⑪ マルコの制定語はセム語的要素が最も強い記事で、エレミアスは二〇項目にわたるセム語的要素を指摘している。この定型がセム語の歴史記述の特徴をもった *katō* で始まっている事実や、セム語の特質である主語の欠如から、マルコの内容には礼典以前のものとしての痕跡が認められ、最初にあったのは礼典の定型としてではなく、歴史記述であった、と言われている(エレミアス『前掲書』三一一頁)。
- ⑫ エレミアス『同書』三二〇頁
- ⑬ Kittel (ed.), *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. II, pp. 754-755. 「祝福という概念はギリシヤ語の世界では驚くほどの役割をもち合わせている。特別にこれに相当する言葉がないのである」(七五五頁)。
- ⑭ エレミアスは、ルカ九・一六の魚とパンに関する記述の中で *ἐβλόγησε αὐτούς* がマルコの同一記事における *κατακλίσαι* の位置変更によることに着目し、食卓祈禱が一種の祝福に変化している例としてあげている(『前掲書』二八〇頁)。
- ⑮ エレミアス『同書』二六五頁
- ⑯ エレミアス『同書』三〇三頁
- ⑰ *τῆν τροφὴν ὑμῶν τῆν ὑπέρ ὑμῶν* (第一コリント七・一二) *τὸ καὶ ἡμῶν ἡμῶν τὸ πρὸς ὑμῶν*, (第二コリント九・三)

- ⑱ *toûto poi êarton to oûna* (パウロ) *to toûto êarton to oûna mou* (バルコマタイ、ルカ)
- ⑲ R.H. Fuller, *The Mission and Achievement of Jesus*, 1963, p. 69.
- ⑳ Daniel 2:34. *rāghlōbi di pharzelā wehāspā* Mark 14:24. *dēn* (hādēn) *hū idmi delikēyamā*.
- ㉑ 出エジプト二四・八、セカリヤ九・一、エノキ三二・三
- ㉒ *toûto lukanii* 二九 *karōi dardēpai sūnō kaōōs dēdērdō moī o parhō mou parielaw*.
- ㉓ Fuller, *op. cit.*, p. 70.
- ㉔ Higgins, *Lords' Supper in the New Testament*, pp. 49 ff.
- ㉕ エノキ『前掲書』三三四頁。「*to aijō mou tōs dardēpōs*」といふ表現形式から、これが最古のテキストに含まれていなかったという結論を言語の上から導き出すとする立場は根拠を失うことになる。」
- ㉖ Higgins, *op. cit.*, pp. 34-35. ㉗ Davis, *op. cit.*, p. 249.
- ㉘ 松木治三郎『イエスと新約聖書の教会』日本基督教団出版局、一九七二、二〇七頁。松木氏はイエスの死後おそくとも七年以内にパウロが受けたとしているが、その根拠については何の言及もなし。
- ㉙ 出エジプト二二・一四、二四―二七、一三・三、九、申命一六・三
- ㉚ 最後の晩餐が過越の食事であったか否かの議論は今日なおも決着を見ずに展開されている。共観福音書は最後の晩餐が過越の食事であるとするが、ヨハネの福音書は過越の準備の日における食事であると、両者の間に一日のずれがあることになる。ここで取り扱うべき主題ではないが、過越の食事としての最後の晩餐が最も有力である。これはエレミアスやヒギンズに代表されている。過越の食事でないとする見解も根強く、英国の学者に多く見られる。V・テイラー、フラー等に代表される。日本でも加納政広氏が『過越伝承の研究』の中で、過越食事説に異議を唱えている。
- ㉛ 出エジプト二二・一四以下と一三・一八以下に、過越の食事の意味を子供たちに語り伝えるようにとの命令が記されている。これが過越ンガターの基礎となっている。
- ㉜ Davis, *op. cit.*, pp. 249-250. テービスの主張はパウロがイエスの真意とは無関係に両方を結合させたというのではなく、イエスにおいて暗示的なものを明示的なものにしたという意味においてである。
- ㉝ David, *ibid.*, p. 249. ㉞ Higgins, *op. cit.*, p. 26.

- ㉞ 杯に関するくり返し命令にのみ用いられている。第一コリント一一・二六の *ōdakis* に始まる節をパウロのことばと理解する立場から二五節の *ōdakis êan pōtōre* をパウロの挿入とする議論もある。
- ㉟ V. Taylor, *The Gospel according to St. Mark*, 1963, p. 545. "Mark may have known them and have taken the command for granted, or, alternatively, the words may express in direct speech a conviction of which Christians were conscious from the first."
- ㊱ 後述する「*hōn* 裂き」から彼らが主の晩餐を守っていたことが立証される。
- ㊲ Taylor, *op. cit.*, p. 547. エレミアス『前掲書』二八八頁～二九二頁。
- ㊳ 「これはイエスの時代のユダヤ教では杯を祝福する時の、それも食事の前と後との両方の祝福の常套の定型である」(エレミアス『前掲書』二九〇頁)。
- ㊴ *perā tola ên* は回心後三年のことであろう。しかし満二年後かも知れない(山本泰次郎『ガラテヤ書』七一頁)。
- ㊵ *ōk at' dōpōrtōw oūdē d' dōpōrtōw* (ガラテヤ一・一)と同じ意味である。
- ㊶ H.N. Ridderbos, *The Epistle of Paul to the Church of Galatia*, 1968, p. 65. 彼はパウロのマリヤ滞在を比較的短い期間であったとし、回心とダマスコでの宣教(九・一九―二〇)との間に位置づけよう。
- ㊷ F.F. Bruce, *The Book of the Act*, p. 204.
- ㊸ Fuller, *op. cit.*, p. 66.
- ㊹ パウロの回心前の記事は使徒二・四二、四六の二箇所だけである。㊺ Bruce, *op. cit.*, p. 79.
- ㊻ 山谷省吾『新約聖書神学』七六頁～七七頁。*hōn* 裂きを愛餐と解し、そこに含まれている要素が発展して、クレズム教会の聖餐が成立したとする。
- ㊼ Hunter, *op. cit.*, p. 75.
- ㊽ この項の研究においてはエレミアスの貢献とその鋭い洞察に負うこと大である(エレミアス『前掲書』一八二頁)。
- ㊾ エレミアス『同書』一八二頁 ㊿ エレミアス『同書』一八四頁 ㊽㊾ エレミアス『同書』一六八頁
- ㊿ エレミアス『同書』一七八頁―一七九頁 ㊽㊾ エレミアス『同書』一七九頁。